

II. 米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

ボランティア・マネージメントの役割としては、次のようなものがあげられる*¹。

- ボランティアを使う方針の明確化
- ボランティア・プログラムの作成
- ボランティアの募集と採用、配置
- ボランティアのサポートと教育
- 評価

また、年鑑「Volunteerism | R.R. Bowker 社出版 | 1991年発行の第3版が最新」では、上記のような大学講座をはじめ、サマー・コースやその他各種セミナーに至るまでの「ボランティア・マネージャー教育」に関する全米の情報が総覧できる。

メイヤーズ・ボランティア・アクション・センターでも、ボランティア・マネージメントに関するオリエンテーションが行われており、インタビューでも、「ボランティアで一番難しいのは彼らを“使う”ことであり、この認識を持たないところは苦勞する」というコメントがあった。

それほどボランティアのマネジementは重要であり、その要を担うボランティア・コーディネーターの教育、育成も、米国の多様なボランティア活動を支える基盤のひとつと言える。

(4) ボランティアとコミュニティ

米国では、芸術文化の分野に限らず、教育、研究、保険・医療、福祉などの様々な社会サービスが、政府や行政機関ではなく、民間の非営利組織によって提供されており、それは、米国の社会構造そのものが、歴史的にもまた制度的にもわが国のそれとは大きく異なることによる。

そして、こうした NPO の多様で活発な活動を支えているのが、地域社会やコミュニティを改善していこうという、市民ボランティアの精神だと言われている。

今回実施した米国の劇場やホール、そして関連機関に対する調査結果をみても、まず地方自治体が公共ホール・劇場を建設し、それを運営するためにボランティア制度を導入しようとしているわが国の実状とは、大きくかけ離れていることが明らかとなった。劇場やホールを建設し運営することそのものが、地域社会に奉仕するボランティア的な発想から生まれている。そして、こうしたことを理解するには、米国における「コミュニティ」の概念について確認しておく必要があるだろう。

「コミュニティ」という英語は、しばしば日本語で「地域社会」といったような言葉で代用され、あたかも地理的な範囲を意味するもののように認識されているが、アメリカにおけるコミュニティという言葉にはもっと大きな意味の広がりがある。

アメリカにおけるコミュニティを理解するには、「利害・宗教・国籍・文化などを共有する共同社会」とか「思想・利害などの共通性」という訳語を用いた方が的確だ。すなわち、

*¹ 文化行政とボランティアに関する報告書 | 東京都生活文化局 | 1994年5月

「Black Community」と言えば黒人の人たちが関わる社会全体を指し、「Gay Community」と言えば同性愛者たちが形成する社会を指し、「Catholic Community」と言えばカトリック信者たちが形成する社会を指す。さらに「Business Community」と言えば企業同士のつきあいや経済界、「Middle Class Community」と言えば中産階級の家庭群、そしてもちろん「Arts Community」と言えば、芸術に携わる人々や団体のことを指すのである。

こうしてコミュニティの意味を「思想・利害を共有する社会」と捉えた時、アメリカにおけるボランティアの位置づけはとてもわかりやすいものになる。例えば、今回調査した「シンフォニー・スペース」や「スナッグ・ハーバー・カルチュラルセンター」などの起こりは、「建物を取り壊しから守り、文化施設として利用したい」と考える“同好の士”の集まりだったわけで、これはすなわち「思想・利害を共有する」人々が、実際にその思想を“活動”へと転化させたカタチにほかならない。そのカタチが法人格を有したものが、「非営利団体」であり、その非営利団体に同じ思想・利害を共有しようと集まってくる人が、ボランティアだと言える。

逆の言い方をすれば、ボランティアというあくまで自発的な生産活動は、「コミュニティ感覚＝共通の利害意識」があつて初めて成し得る行為だと言えるだろう。

こう考えてくると、非営利団体の側がボランティアをリクルートする際のポイント、そしてボランティアたちを効率よく管理するプログラムのポイントが見えてくる。つまり、「ボランティアやボランティア予備軍らにいかん『共通の利害意識』を持たせる“仕掛け”をつくるか」が重要なのである。

もしもコミュニティが、単に「地理的広がり」と同義だとすれば、劇場やホールにとってのコミュニティとは、そのまま「商圈」を意味するにとどまってしまう。だが、その商圈の中には、人種、性別、宗教、性癖、経済状態、ステイタス、趣味、ライフスタイルなど様々な“小社会”があるわけで、「共通の利害意識」とはまさにこういった切り口の中にこそ存在する。そして当然、これらの小社会ごとに、「ゲイ・コミュニティの共通の利害意識」、「リタイアメント・コミュニティの共通の利害意識」、「シングル・マザーの共通の利害意識」などは、異なっている。

上手なボランティア・プログラムとは、その地理的商圈の中にはどのような種類のコミュニティが存在しているのだろうか、彼らと自分ら劇場との「共通の利害意識」はどのような形で存在し得るだろう、と探り出す行為から始まるものだろう。